

<p>6日 (日)  II コリント 10章</p>	<p>「わたしたちは肉において歩んでいますが、肉に従って戦うではありません。わたしたちの戦いの武器は…神に由来する力であって要塞も破壊するに足ります」(3-4節)。目の前の困難を見ると、つい肉の力で戦おうと「もがく」わたしがいる。今日「神に由来する力」を祈り求め、体験する者とさせてください。</p>
<p>7日 (月)  II コリント 11章</p>	<p>「だれかが弱っているなら、わたしも弱らないでいられますでしょうか」(29節)。パウロは伝道の先々で諸教会のやっかい事に心を寄せて「一緒に弱った」という。ふつう「弱ること」は避けたい。しかしパウロは「あらゆる苦難に際して慰めてくださる神」(1・4)を体験的に知っていた。パウロを生かした秘密がここにある。</p>
<p>8日 (火)  II コリント 12章</p>	<p>「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(9節)。「わたしは弱いときにこそ強い」(10節)。パウロは肉体的な「とげ」を持っていた。慢性的にパウロを苦しめていた病気だと言われている。しかしキリストの恵みは不思議だ。パウロは「弱いときにこそ」強めてくれる方に生かされていた。</p>
<p>9日 (水)  II コリント 13章</p>	<p>「終わりに、兄弟たち、喜びなさい。…励まし合いなさい。…そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます」(11節)。教会を励ます時、パウロは多くの場合にまず「喜びなさい！」と語り始める。なぜなら教会を建てておられる「共なる主」を知っていたから。わたしも今日「主への喜び」から祈りを始めよう。</p>

聖書日課 『からし種』 2019.1.6～1.13

<p>10日 (木)</p> <p>ガラテヤ 1章</p>	<p>「キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて…、わたしはあきれ果てています」(6節)。ガラテヤ教会への手紙は、実に激しい叱責で始まっているが、そこには「キリストの恵みから離れてはいけない！」というパウロの熱い祈りがある。真剣に叱ってくれる言葉に向き直る「わたし」とされて。</p>
<p>11日 (金)</p> <p>ガラテヤ 2章</p>	<p>「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」(20節)。異邦人と食卓を囲むと「神に裁かれる」と怖がったユダヤ人たちに対してパウロは敢然と闘った。キリストの愛と犠牲を無にしないために。今日わたしの信仰の「芯」にキリストが生きているか。</p>
<p>12日 (土)</p> <p>ガラテヤ 3章</p>	<p>「バプテスマを受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」(27節)。「結ばれた」と訳されている言葉の原意は「キリストの中に沈められて」の意味。キリストの恵みにすっぽり沈められ、キリストを着るように包まれて生きる。今日、その恵みを感じながら、事柄に向かう信仰を与えたまえ。</p>
<p>13日 (日)</p> <p>ガラテヤ 4章</p>	<p>「神は、その御子を…律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは律法の支配下にある者を贖い出して、神の子となさるためでした」(4-5節)。パウロが伝えた福音。キリスト・イエスは、律法の下に生まれた私たちを、「アッバ (お父ちゃん)」と呼べるほど、神と近く結びつけて下さる喜びの知らせ。</p>